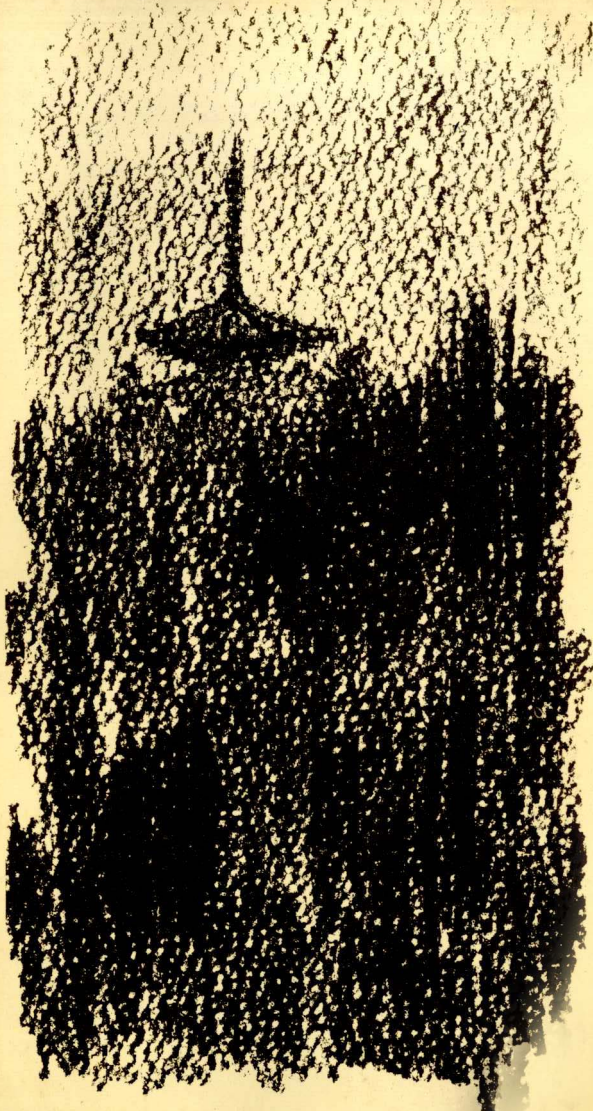


自註鹿鳴集



じ ちゅう ろく めい しゅう
自 註 鹿 鳴 集



定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 青 32

昭和四十四年六月三十日 発行
昭和四十六年二月十日 四刷

著 者 会 津 八 一

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式会社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三(二六〇)二二一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

自 註 鹿 鳴 集

会 津 八 一 著

序

予が家の鹿鳴集は、昭和十五年創元社より世に送りたるものなるも、その中には、大正十三年春陽堂より出したる南京新唱の全篇を含み、またその南京新唱の中には、明治四十一年奈良地方に一遊して得るところの歌若干首を含めるが故に、今ここに収むるところは、実に二十八歳より六十歳に至る予が所作を網羅したりといふべし。この故に今これを續きて読みもて行くに、自家半生の行止と感懷と、多くはこの中に反映し、当年の事眼底を来去して尽くるなし。また樂しからずとせず。

されど、また思ふに、予が初めて奈良の歌を詠じたる頃には、その地方の史実と美術とを知る人、世上未だ多からず。しかるにまた、予が慣用したる万葉集の語法と単語とは、予が終始固執せる総平仮名の記載と相俟ちて、予が歌をして解し易からざらしめ、甚だ稀にこれに親まんとする人ありても、その人々をすら、遂には絶望して巻を擲たしむることも屢なりしなるべく、すべてこの歌集の流布をして、ますます狹隘ならしめたるべきは、想像に難からざるなり。しかるに日を逐ひ、年を経るに従ひ、世上には尚古の風次第に興り、遂にはこの集の世に行はるること、また漸く広からんとす聞く。およそ文芸に携はるもの、その生前に於て江湖の認識を受くるの

難きは、古来みな然り。予齡すでに古稀を過ぎたりといへども、今にして之を聞くは、むしろ甚だ早しといふべし。

かるが故に、ここに旧稿を取出で、新潮社の請に応じて、世に敷かんとするに当り、予が歌の美術と史蹟とに関するもの、及び古典、古語に係はるものには、遍く小註をその左に加へたるほか、歌詞は旧に依つて総仮名を用ゐ、品詞によりて單語を切り、以て來者をして再び誦読に誤りなからしめんことを努めたり。嗚呼、予の粗漫なるや、この類老に及びて、わづかに四十年前の宿債を償はんとするに似たり。何人かこの迂拙を嗤はざらん。また何人かこの痴頑を憐まざらん。

昭和二十七年十二月

著 者

例言

一、この書、題して自註鹿鳴集じちゆうくめいしゅうといふ。鹿鳴とは、巻中の歌、著者が青年の日よりしばしば奈良地方に遊びて、その間に成れるもの最も多きに居れば、これに因ちなみてなり。

一、註釈は文法、語意、史実、宗教、伝説、地理、土俗より作者身辺の雑事に至るまで、すべてこの集に収めたる歌の会得を助くるに必要なるべきことを網羅せり。

一、読者の学力として、著者がここに執筆に当りて期待せるところは、現制の高等学校より大学に至る生徒学生を以て標準となせり。

一、註釈中に現はるる人物の生歿せいぼつ、社寺の興廢、書籍の述作等につきて、知らるる限りその年次を西曆を以て記入して、むしろやや煩に渉わたるをも厭いとはざりき。これを以て時代の推移につきて明確なる理解に資せんことを期せるなり。

二、註釈の史蹟しせきと故実こじとに關せるものは、古來の通説とふせに拠よれるもの多きも、著者の私見しけんを以てせるところ亦た少からず。また引用せる群書は、必らずしも歴史學者の謂いはゆる根本資料こんぽんしりょうのみに限らずして、往々稗史はいし雜載ざさいの類にも及べり。蓋しけだこれ學術の論究ろんきゅうにあらずして、短歌鑑賞のためにせんとする書なればなり。

一、註釈中、つとめて引用の書名を挙げて、一々その出所しゅしよを明かにせんとしたり。これ、読者が、他日これらの原典を得て繙讀はんどくするの日あるべきを思ひ、これがために便ならんと欲したるなり。

一、京都奈良の地は、古美術の淵藪えんそくと稱すべし。作者は常にこの間に徘徊はいかいして、さきに自ら詠ずるところを今自ら註解して、この書を成したるも、通篇いつぱんの中未だ曾かつて好んで美術の趣味とその好惡こうおとを説明せんとしたることなし。蓋し、これを指さして説けば、徒いたづらにその指端しゆたんを見て、その物を見るを忘るるもの多く、真諦しんてきは自ら悟るべくして他の説明に俟まちつべきにあらず、而もまた、たまたま説き得たりとなすも、多くは第二義以下に墮おするを以てなり。されば、この書、解きてこれに触れざるを以て、著者のこれを見ること甚だ輕かろきに因よるとなすこと無からんことを望む。むしろ甚だ重きに因ればなり。

一、南都諸刹しよさつのうち、法隆寺につきては、学界の研究未だ徹底せざる点多く、東大寺につきては、
縷述るじゆつを要する綱目甚だ少からず。ともにこの小冊子に於て尽すこと能はず。幸に近時行はる
る中等教科書に、一応の説明あるに信賴して、特に註釈を加へざりき。

一、篇中の用語の中、同義同音にして、しかも文字を異にすること「廬遮那るしやな」と「廬舎那るしやな」、「弥
陀だ」と「阿弥陀」、「鈔しやう」と「抄しやう」、「伎ぎ」と「妓ぎ」の如きあり。ともに原典を重んじて強て統
一を加へず。されど「癡」を「癡」となし、「掘」を「堀」となすの類は是正を加へたる所
あり。

一、「印象」と題したる唐詩に附記したる作者の小伝は、概ね臧励和等諸人の大辞典を抄出した
るも、ひとり李収りしゆうは『全唐詩』によれり。ここにこれを明かにす。

一、寺院の宗別は書中に一々之これを註記したるも、古来ややもすれば移動あり。ことに大戦以後は、
新宗の興起するものまた少からざるが如きも、著者は、これを与り聞かざること多く、また、
たまたま之を聞くも、この書中に記せるところに關すること少ければ、すべて戦前に従へ
り。特に之を記す。

一、巻末には、集中に現はるる地名、社寺名、神仏名等につきて、索引を附したり。往々これを
実地の歴遊に携へんとする人あるべきを想ひ、その利用に備へんとしたるなり。

一、この書、最初は一切の註釈は本文の欄外に組み入るる意図なりしがために、行文は極めて簡
省ならんことを期したるに、後に至りて、あまりに簡省にては、初学の読者に解し易からざ
るべきに気づき、知らず知らず行文を伸長したるがために、組み方の初案を変更するに至れ
り。ただ憾むところは、これによりて説明の精疎に統一を欠きたる所多きにあり。

一、著者は、さきに東京にて、戦災のために悉く蔵籍を失ひ、歸り來りて故郷に幽居し、資料檢
索の便乏しきのみならず、齡すでに古稀を過ぐること数年、ことに最近血圧しきりに昂騰し、
執筆意の如くならざるを、尚ほ床上に強起して稿を進めたることさへ屢なれば、篇中或は誤
脱なきを保しがたし。天もし仮すに余命を以てせば、再び補訂の筆を執るべし。

一、著者は、さきに昭和五年一月、一文を草し、雑誌『東洋美術』第五号に掲げて、法隆寺の諸
像の伝来を論じ、同寺の所謂「六体観音」を以て橘寺の旧物なりとなせり。しかるに今こ
の書中にては、これを中宮寺に帰せしめんとせり。知らず学者のいづれに与すべきかを。

一、著者のこの書を綴るに当り、齡はすでに古稀を過ぐること三歳、流竄の身には群籍の檢索にその便乏しきに、老と病と、こもこも執筆を妨げ、しばしば意挫けて中絶せしめんとせり。ことに校正の事に慣れざるに苦しみしに、新潮社員佐野英夫君よく著者を助けてその功を竣へしめたり。これを記してこれを謝す。

目次

序 例
言

南京新唱……………一五

南京新唱序(山口剛)……………九一

南京新唱自序……………九四

山中高歌……………九七

放浪唸草……………一〇三

村莊雜事……………一三三

震余……………一四一

望鄉……………一四七

南京余唱……………一五一

斑鳩……………一七七

旅愁……………一八三

小園……………一九三

南京統唱……………一九九

比叡山……………二〇九

觀仏三昧……………二二七

九 官 鳥……………二五三

春 雪……………二五九

印 象……………二四五

鹿鳴集後記……………二五七

解 說……………宮川寅雄 二六六

索 引……………二七三

写真 入江泰吉

自註鹿鳴集

南京新唱

明治四十一年八月より
大正十三年に至る

南京・ここにては奈良を指していへり。「南都」といふに等し。これに對して京都を「北京」といふこと行はれたり。鹿持雅澄の『南京遺響』佐佐木信綱氏の『南京遺文』などいふ書あり。みな奈良を意味せり。ともに「ナンキン」とは読むべきにあらず。